

ESSAY いたずら

倉元 信行

3

グールド

一周して同じ曲が回ってきた時も涙ぐんでしまった演奏会に行っても涙が出るなんていうことはないのに 米国行き飛行機で機内放送のクラシックのチャンネルを聴いていた時のことである。もう何度も海外に行っているのに日本を離れる感傷なんかでない。

それは グレン・グールドの弾くハイドンのピアノソナタであった。

帰国するとすぐ2枚組みのそのCDを求めに行った。

やっぱりすばらしかったグールドに熱狂的なファンが多いはずだと思った。

独自のリズムで刻むピアノのタッチは他のピアニストとは完全に一線を画している。

モーツァルトやベートーベンのソナタではジャズ的だと専門家の批判もあったそうだがとにかく心地よく 楽しくなるからこちらの勝ちだと私は思う。

前から気になっていたことがある この若くして逝った天才ピアニストを有名にしたバッハの"ゴールドベルグ変奏曲"は ずっと前からCDを持っていたのだが 素人の私にはなぜか楽しめなかった。このために多分グールドに手を出していなかったのだと思う。

この理由が最近分かったような気がした。

たまたまデパートの売り場にあった試聴盤に、この曲があったのでヘッドホンを手を取った 最初の一節が流れ始めたとき、
「ああそうだったのか これはもともとチェンバロの曲だったのだ」と納得したのである。

曽根麻矢子さんという若いチェンバリストの弾くこのCDは いま私の愛聴盤になっている 伸びやかな演奏も 車の音に悩まされながらバリの教会で録られたというこの音の響きもすばらしいの一言である。

こういう訳でもう40枚ほどになったグールドのCDを収めたケースの"ゴールドベルグ"の所にだけは、曽根さんが並んでいるのである。

ピアニストといえばドイツに出張していた時に、B.ミケランジェリという人の演奏を聴いたことがある。

音楽評論家の吉田秀和さんが 聴きたくてもどうしても聴けなかったピアニストと本に書いていたように記憶している。

日本に来て ピアノの調律が気に入らなくて演奏せず帰ったとか そういう気難しい性格を物語る逸話の持ち主でもある。

このような事は後で知ったことで その日ホテルに着いて 何か催しがないかと尋ねて出かけた偶然の演奏会だったのだが。

ミュンヘンのコンサートホールで開かれたこの夜の演奏会で 哲学者のような風貌のこのピアニストはベートーベンとドビュッシーを硬質の音で響かせた。

私のいくつか前の席には15才くらいの女の子がお母さんと座っていたのだが 風邪でもひいているのか時々小さな咳をしている。

ベートーベンの2つのソナタが終わり幕間が来た 回りの人とその親子が何か言い合っている。多分迷惑だから出て行くように回りは言っていたのであろう。

かわいいそうに どうとう女の子は席を立たされた。

これと比べるとアメリカはおおらかである ニューヨークフィルということもあったかもしれないが、ピアニストは大仰な大きさと鍵盤をたたき オーケストラはこれでもかというように目いっぱい鳴らす。

聴いている方もお酒を飲んでいて いびきをかきそうになって奥さんにつつかれているのも居る。

ソロとオーケストラという違いはもちろんあるが、雰囲気は全く違う日本はやっぱりドイツに近い。

